

思考し体験するキャリア教育 「みらい科」で継続的に学び 「みらい論文」で興味関心を問う

● 麴町学園女子中学校高校 (東京・私立)

取材・文 / 永井ミカ

思考し体験しながら学び、これからの社会で生きていく能力(コンピテンシー)をつけていく。みらい科では「コンピテンシー」を「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」「自己理解・自己管理能力」「キャリアプランニング力」というキャリア教育に

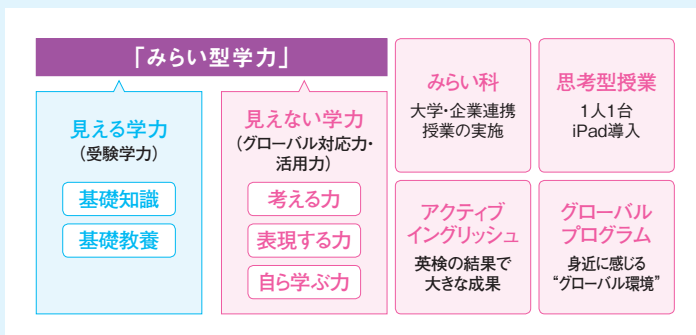
つづけたい力やゴールを明文化
徐々に負荷を上げる仕組みに
同校では多様化する社会に対応するための新しい学力を「みらい型学力」として定義し、その学力をつけるため4つの取り組みを実施している。「思考型授業」「アクティブイングリッシュ」「グローバルプログラム」、そして「みらい科」。みらい科はキャリア教育を担う部分で、中学1年から高校2年までの5年間、必ず毎週1回行われる(ツール1)。

おける「基礎的・汎用的能力」に定義した。そして、カリキュラムを作るうえで、もう一つ重要視しているのは、チャレンジ精神や諦めない継続性。「最近の社会や家庭には『どうしても嫌ならやめてもいいよ』という寛容さがあります。それも大事ですが、一方でつらくてもがんばることの大切さを見直したい。5年間をかけて少しずつ生



進路指導部長 花形映里先生(左)
主幹教諭・学年主任 河越多衣子先生(右)

● 「みらい科」の位置づけ



麴町学園が整理した「みらい型学力」の概念。この学力をつけるために4つの施策に取り組んでいる。「みらい科」は4つのうちのひとつで、キャリア教育の部分を担当。

進路指導の課題とテーマ

周辺には皇居、官公庁、有名企業の本社…麴町学園女子中学校高校は東京の中心部に位置する私立の中高一貫校。自立した女性を育てるためのキャリア教育に力を入れており、そのための独自科目「みらい科」を10年ほど前に誕生させた。

近年、高大接続改革など国の教育改革の動きが活発になる中で、同校でも「我が校の生徒たちはどうだろう」と改めて考える動きが出てきた。中学受験激戦区の中で、生徒たちは必ずしも第1志望で入学してくるわけではない。入学時、生徒にも保護者にも自信のなさが見て取れる。例えば保護者の「この学校できちんと学べるか?」という不安。それを払拭するにはどうすればよいのだろう。そこで導かれた結論は「子どもに自信をもたせ、楽しそうに学校に通ってもらうことが大切。できなかったことができるようになったという自己肯定感。そして、すぐに諦めない粘り強さと継続する力を育てよう」

さらに新学力観にも照らし合わせ、中学1年から高校2年までの5年間のみらい科の中身を見直した。単発的ではなく、学びを継続し積み上げ、徐々に生徒に負荷をかけ、生徒自身に興味もてるテーマを見つけ出させる。学校は生徒が主体的にテーマを見つけ出せるような質の高い「きっかけ」を与える。そして、学びの集大成として仕上げるのは「みらい論文」。これを生徒たちが進路に結びつけていくという流れが、同校が目指す進路指導である。

● 進路状況(2018年3月実績)

大学進学80人、短大進学3人、
専各進学2人、就職1人、その他11人

国際系の学部学科に進学する生徒が増加。留学ができる大学を目指す生徒も少なくない。学校としてはMARCH以上の大学に進学する生徒の数を伸ばすのが当面の目標。

● School Data

1905年創立 / 普通科 / 生徒数女子526人

ツール1 「みらい科」5年間の流れ(抜粋)

| | | |
|------|-------------------|---|
| 中学1年 | 自己を知ろう・他者を知ろう | ・エンカウンター ・フィールドワーク(事前学習・事後学習) ・my PDCAを意識しよう ・クリティカルシンキング ・外部教材を使った思考トレーニング ・ブックトーク |
| | 自己を伝えよう・他者を受け入れよう | ・エンカウンター ・日本文化理解 ・国際理解 ・修学旅行とふりかえり ・外部教材を使った思考トレーニング ・地域理解 ・クリティカルシンキング |
| 中学2年 | 自分を見つめて学ぶ意義を考えよう | ・エンカウンター ・職業インタビュー ・クリティカルシンキング ・職場体験(希望者) ・自己理解 ・適性検査 ・大発表会(学ぶ意義) ・大学出張講義 ・ポスターセッション |
| | 自分の可能性にチャレンジしよう | ・シンキングツール ・大学講義 ・はじめにコンテスト ・職場体験(希望者) ・クリティカルシンキング ・オーストラリア理解 |
| 高校1年 | 自分の力を信じて大きく飛躍しよう | ・企業コラボ体験 ・みらい論文ポリッシュアップ ・みらい論文発表会とふりかえり |

中1のエンカウンターから始まり、フィールドワークや思考トレーニング、発表などを繰り返し、高2で論文を仕上げる。外部ツールも積極的に使いながら少しずつ難易度を上げ生徒に負荷をかけていくカリキュラムとしている。「その中で主体性を育て、教員が手をかけなくても学びが持続できるのが理想」



高1・高2ではみらい論文や企業コラボなど、中学時代の学びを応用し総合的な力を発揮させる取り組みが増える。教員が手をかける部分も徐々に減っていく。

徒に負荷をかける仕組みにしています」と、みらい科担当の河越多衣子先生。河越先生は、教員によるプレをなくすためにオリジナルの教員向けみらい科シラバス(ツール2)を作成、みらい科の意義や、教員はファシリテーターとしてどのようなスタンスで進めるべきかなど、みらい科のあり方を周知した。また、シラバスでは、個別のプログラムについては細かい指導案などを示すのではなく、目的やゴール地点を明確に設定。学年や担当がアレンジしながら同じゴールを目指す仕組みとしている。

ローカルからグローバルへ
体験を積み思考力を鍛える

みらい科では体験型、連携型のカリキュラムが各学年に用意されている。私立のため学校のある土地にあまりなじみのない生徒が多い中、自分の学校のロケーションを見つめようというところで始まったのが中1の「さくらフィールドワーク」。

中2では日本文化や国際理解を学ぶ。戦争体験のあるOGの講演を聞き、「戦争と平和」について考えてから世界へ。修学旅行先のアイルランドは日本と同じ島国であり女性の管理職が多いことなども踏まえて選ばれたという。

中3では初めてキャリアプランニング能力を育成するカリキュラムも加わる。職業インタビューや職場体験(希望者)、大学出

桜の名所も多い地域の環境保全活動の一環として、樹木医の話や聞き、フィールドへ出てさくらの木の診断をする。

その後、ローカルからグローバルへ生徒の目を向けていく。中2のアイルランドへの研修旅行に向けて、中1からアイルランドをテーマにした本を読みブックトークを行う。北欧の妖精と日本の妖怪を比較したり、アイルランドでよく食べられる芋料理をテーマにしたりするなど生徒の選択は幅広い。図書の魅力を伝えることで自己発信・他者理解の能力を育てる。

ツール2

ダウンロード可

**目標：全生徒が、社会で求められる
セレンディピティの資質を体得**

コンピテンシー：今後の社会において求められる能力。みらい科「人間関係形成・社会形成能力(communication)」[課題対応能力(problem solving)]「自己理解・自己管理能力(self-management)」[キャリアプランニング能力(career planning)]を指します。

セレンディピティ：変動性・不確実性・複雑性・曖昧性が増していくと考えられる今後の社会(VUCA社会)において必要とされる姿勢、もの捉え方。自分に限界を定めず、物怖じせずにさまざまなことに関心を持ちチャレンジし、継続性を持って取り組み、失敗してもあきらめずに跳ね返していく(レジリエンス・GRIT)を体得することで、さまざまなチャンスをつかみ取る機会を多く有することができる。その資質のこと。

「計画的偶然性」(クワンソルソン)
「チャンスは、心の準備のできている人のところからやってくる」(リスツール)

**授業を進めるにあたって
教師が気をつけるべきこと**

- ・教師は「teach」ではなく「facilitate」することをお勧めします。授業に当たってください。教師は、オファストに現れるならば、自ら議題を演説するようにはなりません。教師一貫して「指導者」でいること。また、生徒が主体的に活動することに安心して、何もしなくてもいいというわけでもありません。マインドで教えるならば「指導者」として、教師の活動の中に入っていきください。
- ・教師は、必ずしも自分の本意に沿った活動の展開と進めたい「ゴール」を決め、生徒にそのゴールをしっかりと教諭させてから活動スタートさせてください。また、授業中にも、授業を通じて何を学び、どのくらい成長したのかを振り返らせてください。その際、必ずルーブリック表を用いて評価をしてください。これを怠ると、その生徒がその授業でどんな成長をどれくらいできたのかを生徒も教師も認識がなくなり、学習効果が下がってしまいます。
- ・授業を進める際は、教師自身がその時々のゴール地点を強く意識すること。教師がブレたら生徒も動揺してしまい、その授業は失敗となります。
- ・ワークをさせている間は、教師は基本的に教室内を動き回ります。質問を聞き、生徒の活動を視るまで観察し、生徒の活動がゴール地点にきちんと向かうように、ヒントを与えながら観察してください。
- ・ヒントを与える際、教師が特定の生徒の成長を望む場合は全く問題ありません。その成長を促進することはもちろん、その成長が多くなる生徒が伸びることであれば、満足することOKです。
- ・生徒の考えが、あらかじめ定めたゴール地点に向かうように、ヒントを与えながら「仕向けて」授業することOKです。絶対にしてはいけないのは生徒の意見を強く否定することです。ゴールに向かう方向性が大きく異なるような時に強く否定することは必要ですが、強制的にゴール地点を押しつけてはいけません。

張講義、適性検査を実施。職業インタビューはグループ単位で地元である麹町にある企業へのアポどりから始め、これからの時代にどのような人材を求めるか生の声を取材する。学年最後には総括として、1年間で学んだ内容をプレゼンテーションする。

中学で培った能力を
高校で応用・発揮させる

高1・高2は3年間で培ってきた能力を
応用する時期。1万字の「みらい論文」にも取り組む。

教員向け「みらい科シラバス」。みらい科でどんな力をつけるのか、教師はどのように指導するのが書かれている。この後、各取り組みについても個別の説明があるが、何の目的があり何をゴールとするのかを端的に説明。細かい部分は担任の先生のやり方に任せる。

ツール3 ルーブリック評価表と生徒のふりかえりシート

| 項目 | 定義 | S | A | D |
|--------|------------------------------|---|---|---------------------------------|
| 課題設定力 | 現状を理解した上で、適切な課題を設定している。 | 独創的な着眼点で適切な課題を設定している。また、現状の問題点を踏まえ、そこから課題設定までのプロセスが明確で、論理的に展開されている。 | 適切な課題を設定している。また、現状の問題点を踏まえ、そこから課題設定までのプロセスが明確で、論理的に展開されている。 | 課題を設定しているが、現状の問題点の理解や把握が不足している。 |
| 論理的思考力 | 複雑な事象の本質を整理し、道筋を立てて説明している。 | 客観的事実のみに基づいて、複雑な事象の本質を整理し、物事を順序立てて結論を導くことができる。 | 客観的事実のみに基づき、物事を順序立てて整理し、結論を導くことができる。 | 事実と感情の違いを理解できる。 |
| 分析力 | 課題の因果関係を理解し、本質(原因)を見出し出している。 | 物事を構成する要素に分け比較し、本質(原因)を見だし、類似する事例に適用させることができる。 | 物事を構成する要素に分け比較し、本質(原因)を見出すことができる。 | 物事を構成する要素にある程度分けることができる。 |

「みらい科」の評価のため25項目のルーブリック評価表を作成。まずは論文で導入したが、今後すべての取り組みで活用する。生徒が自己評価してふりかえりシートに記入したり、発表時には相互評価も行う。

高1では次年度の修学旅行に向けてオーストラリアに関する学習をするが、情報収集、分析、まとめ、情報発信のすべての能力を総合して発揮させる。教員が手をかけなくても中3のプレゼンより質の高いものに仕上げるのが目標だ。

そして高2では、地元の企業や店舗とコラボして商品開発を体験。グループごとに商品のアイデアを出し合い、コンペ形式で代表商品を決定する。学園祭で発表するためのイベント企画もすべて生徒が行う。徐々に上げてきた負荷も最大限にかけ、教員が手をかけることも徐々に少なくなる。多少失敗してもチャレンジ

させ、生徒が自分たちだけの力で疑似社会体験をすることを目指している。

また、5年間を通して複数の外部ツールを用いて思考スキルを高めるトレーニングを取り入れているのも、みらい科の特徴の一つ。さまざまなきっかけを与えながら思考力、判断力、表現力などを養い、「できる」という自己肯定感を高めていく。「『どうせだめ』と思っていたけど、やってみたらできた」という気持ちを大切にしたい。それには、きつかけの質を上げることが何より大事なので、外部ツールも常に見直しよりよいプログラムに入れ替えています(河越先生)

「好き」なテーマを極める 集大成としてのみらい論文

みらい科の集大成はみらい論文で、高1から高2にかけて仕上げられる。1人1テーマで1万字の完成に向け、みらい科の時間とは別に月1回ゼミ形式で実施。学年の枠を超えて全教員が指導に当たる。

必ず生徒が主体的に取り組める「好き」をテーマにする。教員は生徒からどんなテーマが出てきても否定せず、苦しくても好きだから書けるテーマを探させる。テーマが決まれば論文の冒頭部「はじめに」を書き、スライドを作成して各自5分程度でプレゼンする。なぜ自分はこのテーマについて調べようと思ったのか、選ぶまでにどのような経緯があったのか、どのような仮説を立てたような手法で立証していくか：「はじめに」の発表原稿を書きながらじっくり考える。そして他の生徒は敬意を払って聞く。この作業を通して一部の生徒はテーマ設定を変えることもあるが、それも否定しない。もがきながらここを乗り越えさせ、粘り強く論文に取り組み気持ちを作り上げていく。

論文は何度もブラッシュアップし、最終的には大学入試にも活用できるレベルの成果物として完成させるのが目標だ。「生徒のたどる過程を見ていると興味関心の方向性がわかり進路指導の参考になります」と進路指導部長の花形映里先生。回を重ねるにつれ、教員も生徒の「好き」に寄り添い、楽しみながら伴走できるようになってきているという。

成果と課題

みらい論文を道路に結びつける生徒も

漆の研究をきっかけにデザインの視点から伝統文化を学ぶ大学へ進学した生徒。日焼け止めクリームに興味をもって調べ始めたことから、自身の理系志向に気づき論文を入試に活用して難関大学に合格した生徒。また好きなテーマパークについて調べたうちにおもてなし文化に興味をもち今は国際観光を学んでいる生徒：論文を書くことで得た経験を進路選択・進路決定に活かす生徒が出てきたことは、みらい科の大きな成果。「たとえ世の中から漆が消えても、次を見つけて生きていける強い力が育つていると思います」と河越先生は言う。また、みらい科でのさまざまなチャレンジを経て粘り強さが身についた生徒が出てきている実感もあるそうだ。「こういうことをやりたい、学びたい」という気持ちが強くなったので、あとはそこに自信をもって踏み込んでいく学力。低学年からの学習習慣を徹底させ、見える学力と見えない学力の両方を身につけさせたいです(花形先生)